

読	ん	で	み	たい
こ	の	一	冊	

大阪産業経済リサーチセンター
主任研究員 山本敏也



『福井モデル —未来は地方から始まる—』

●藤吉雅春 著 文藝春秋 1,300円+税

長きに渡って東京一極集中の是正が叫ばれているにもかかわらず、ヒト・モノ・カネ・情報の集中は改善するどころか、ますます加速している。政府は、アベノミクスの効果を地方にも浸透させるべく「まち・ひと・しごと創生本部」を設置し、地方創生の名の下に若者の就労・結婚・出産の支援や、東京一極集中の解消に取り組みだした。一方、巷では、県民性やご当地「ゆるキャラ」「アイドル」「グルメ」といったローカル色をテーマしたテレビ番組やイベントなどが増え、「地域発」のさまざまなコンテンツに触れる機会が多くなった。

むろん、東京一極集中の大きなうねりを一朝一夕に抑制することは不可能であろう。しかし、「東京にはない」面白いコトへの欲求、あるいは東京を中心とする政治・経済活動に対する危機感らしきものが、我々の潜在意識のなかで増幅しているのかもしれない。

本書は、タイトルの福井県はもちろん、石川県と富山県を合わせた「北陸3県」を中心に、全国各地の中小企業、行政、市民が持つポテンシャルの高さを紹介している。鯖江市は、眼鏡産業において「日本でもっとも早く中国にやられた町」でありながら、眼鏡フレームの世界シェアの約20%を占める世界三大眼鏡産地の1つといわれる。福井のある中小企業の社長は、繊維や漆器が斜陽産業と呼ばれることに対して、『産業が最先端をいつているから、最初に斜陽になるだけだ』と笑い飛ばしたそうだ。

こうしたエピソードは、地方の中小企業だからといって、視野や物事の捉え方が狭いわけではないことを証明している。人口減少社会で国内市場が縮小するなか、海外市場のニーズへの自社技術の応用や、途上国における環境破壊、農業加工技術の高度化などの課題解決ビジネスにシフトしている中小企業も少なくない。これはまさに、地球規模の視野で考え、地域視点で行動する「グローバル企業」の実践といえる。

さて、本書で印象に残ったキーワードとして、①地域への愛着、②現状への危機感、③外部の知恵と刺激を受け入れる寛容さ、④「逆算の発想」による教育体制を挙げたい。①は、イタリアの郷土愛には及ばないかもしれないが、地域コミュニティがあってこそ、商売が成り立つという意識の高さが、産業の強みとなっている。②の危機感は、常に欠如した部分を自助努力で補う習慣となり、持続的な発展を支えている。③は、企業のみならず地域自体が外部に開放的であり、域外のクリエイティブな人材に対して居心地の良い環境を提供している。④は、急激な環境変化に対応できる新たな仕組みを構築するための、柔軟な発想を育むことである。他の地域より秀でたものがないために、頭を使って生き抜く「自律性」を武器とする戦略である。

本書は、事例で紹介されている数多くの中小企業、首長を含む行政、そして市民らのつながりから、人口減少や産業の斜陽化を克服するためのヒントが、自ずと浮かび上がってくる良書である。読み進めると、福井など北陸の地方都市での取り組みは一見、地味ではあるものの、きわめて理に適っており、最近の風潮である「他人依存」の考えとは対照的な、勤勉さが随所にうかがえる。

福井の姿は、都市や地域のレベルを超えて、諸外国に対する世界のメンター（指導者）としての日本の将来像を考える上でも、大いに参考となるであろう。

【著者略歴】

『Forbes JAPAN』副編集長。1968年佐賀県生まれ。「週刊文春」記者を経て、ノンフィクションライターとして独立。2011年、一般財団法人日本再建イニシアティブの民間事故調「福島原発事故独立検証委員会」ワーキンググループに参加、同財団の「日本最悪のシナリオ 9つの死角」の編著者として関わる。